

和本の紙を調べる

橋口 侯之介（誠心堂書店）

S 紙を見分ける重要性

和本を調べることは楽しい。今は、国文学研究資料館が提供するインターネットの「日本古籍総合目録」が充実していて、書名から著者名、巻数、成立年代などが把握できるのでありがたい。しかし、わたしたちの仕事はそこから始まる。これに価格をつけなければならぬ。その過程にこれまでの経験や知識が総動員されるからだ。とくに高い本の場合、それだけの根拠が必要だ。

そのひとつに紙のことがある。和紙の研究は進んでいるが、書物の紙に限つていうとまだ十分に納得のできる蓄積はない。だから、自分なりの経験で判断をする。とくに紙を見分けることが重要なのだ。

日本の紙文化の中で、平安時代の工夫と努力は敬服に値する。そこで培われた技術や考えかたが江戸時代に広がり、今日まで連続として続く書物観と結びついている。とりわけ雁皮を原料とした斐紙ひしの存在は大きい。この紙は墨の乗りがよく写本に向いていることと、虫がつきにくく化学変化もおこさない。結果として千年の保存が可能だということを実証している。百年たつとボロボロになるような紙を生産した近代の洋紙

など恥ずかしい存在だ。

斐紙の素晴らしさは紙の表裏に文字が書ける厚様だけでなく、透き通るような薄葉もあつたことだ。平安貴族は絹織物にも羅うすものといわれるものがあつて、各種の色を重ね合わせて装束を楽しんでいた。薄様紙も色々に染めて、異なつた組み合わせを愛でた。表が紅色で裏が紫色、あるいは表を白にして裏に蘇芳すおうで染めた紙で重ねる紅梅襲がねなどは『源氏物語』にも出てくる。その組み合わせの趣や美しさが「雅みやび」なのである。

雅の伝統は江戸時代の人たちにもあこがれで、いかにしてその優美さを出すかがセンスのよさにつながつた。

斐紙には光沢があり、それが輝きになる。そのために長時間紙を叩いてつくる打紙うちがみという技法が加わるのである。この手間暇がかかる工程があるので高価で貴重品だつた。したがつて斐紙と、その中世からの呼び名である鳥の子紙はつねに高級品の代名詞である。

それに対して栽培が可能だつたこともあつて楮しとせを原料とした紙は大量につくられた。その楮と雁皮をいっしょにした混ぜ漉きという紙もある。さらに楮紙ちよしを打紙にして鳥の子のような光沢を出す工法もあつたことが最近注目されている。そうなる素人には見分けはつかないが、どちらも普通の楮紙とは相貌が異なるので高級な紙だということはわかる。雁皮を入れた紙や打紙は目が細かいこともあつて比重が高く、同じ大きさの本に比べるとずしりと重いものである。何気ない本なのにこの重さがあつたら並みの紙ではないことになる。このように相貌や重さによってどこか違ふと感じた本はマークする必要がある。

江戸時代になっても奈良絵本や嫁入り本とされる優美な物語や歌集の写本に鳥の子が使われたのはもちろんだが、兵法や礼法、神道の伝授本などにも使われるし、密教の次第もほとんどは鳥の子である。身分の高い者のための本や秘伝は高級な紙を使うのである。その区別が大事だ。

販売価格の載った江戸時代の書籍目録には、上本・下本の区別があつて、その差は使用する紙の違いであると前置きで説明している。雁皮紙は印刷には向かなかつたが、薄様紙なら印刷ができ、この上本とされるものは薄様で刷ることが多い。しかも、そういうときには必ず絹表紙にした。そういう細かいところに平安時代からの伝統が生きているのである。実際、和本を見ていると、よい紙に刷られたものは仕上がりも良く読みやすい。そこを評価しないといけないと思う。

§ 江戸の紙の変遷がわかる

もうひとつの見分け方を紹介しよう。明暦から元禄頃までの江戸の出版はそう盛んではなかった。しかし、独特の版下文字と菱川師宣を代表とする挿絵の入った本には味わいがあつて私の好きな本である。内容は古典か京都の仮名草子の焼き直して新味はないが、鱗形屋、松会や本間屋（喜右衛門）などの出すものには個性的なおもしろみを感じる。それで、この時期の本をあえて「江戸版」と称する。

初期の江戸版には漉き返しの紙が用いられていた。漉き返しというのは、反故紙を集めて煮直して漉くりサイクルである。平安時代には宿紙と呼ばれる、朝廷の発する繪旨などに使われた。この事業が民間に広まり、京都で

は西洞院紙が有名である。それが江戸では浅草あたりで始まったので浅草紙と呼ばれた。江戸版を見ると全体に薄墨色をしている。新品と違って紙の繊維が短いせいか、少しけばだつてしまう。

ところがこの漉き返しの江戸版も、いつのまにか新品の紙に切り替わっていく。いつからというのはいわからない。

関東では武蔵の小川紙や常陸の西の内紙がよく知られているが、これらの製紙が盛んになるのは十八世になってからで、十七世紀末はしだいに江戸地廻りの和紙生産が確立していく初期段階だった。江戸版の紙がいつのまにか新品の紙になることで、関東地方での製紙業の進展がわかっておもしろいのである。そういう目で本を見るのもまた必要である。その後、江戸での出版物は上方並みの楮紙がふつうになるが、赤本・黒本・黄表紙と続く草双紙の市場をつくった鱗形屋ではもっぱら漉き返しを使い続けた。コストが安く、本の売価を抑えることができたからである。それも十九世紀になると、さすがに合巻でも漉き返しは使わなくなる。

こうして見ると、紙の使い方は出版物の変遷にも関係してくる大切な要素であることがわかる。だから、書誌情報に紙のことを記載することが必要である。わたしたちが紙の質で古書の価格を判断するように、各々の本の個別的な情報になるからだ。なぜ、その紙を使ったのかということがその本がつくられた背景にあるので重要なのである。

まだ紙のことまで記している図書館・文庫の書誌情報は少ない。これらで重視されてこなかったからだろうが、今後はぜひ紙を見分けるスキルをあげてもらいたいものだ。